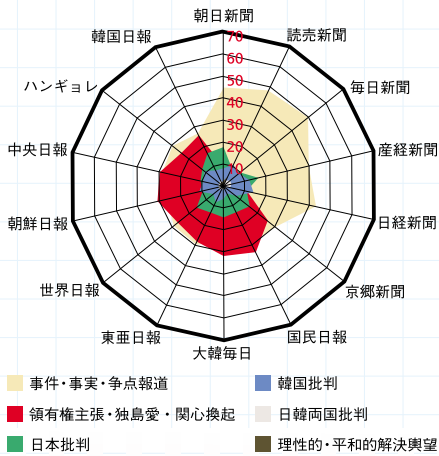


Invitation
to
Science

サイエンスへの
招待

1990年から2001年までの
日韓新聞における
独島/竹島記事論調の比較。



「歴史認識」、「ナショナリズム」を科学することは可能か？

現在も韓国と日本の間を隔てている「独島/竹島」領有権問題。両国の国民はなぜ、かの島を自国領土だと信じるのだろうか？そして、その認識はどのように形成されてきたのだろうか？



玄大松 (ヒョン デ ソン)
東洋文化研究所 助教授

<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/>



2005年3月、島根県の「竹島の日」制定を伝える韓国の新聞の一面

韓国と日本がその領有権を争う「独島/竹島」は、歴史記憶とナショナリズムを喚起する一つのトポスとみることができる。ベルグソンがかつて「薔薇の匂いを嗅いで過去を回想する場合に、薔薇の匂いが与えられてそれによって過去のことが連想されるのではない。過去の回想を薔薇の匂いのうちに嗅ぐのである」と言ったが、私は、韓国人は「独島」の匂いから植民地支配の記憶をどれほど嗅ぐのだろうか、その匂いのうちに、韓国人は日本・日本人のどのようなイメージを思い浮かべ、また作り出すだろうか、などに関心があった。

そして「なぜ韓国人は独島を韓国の領土だと信じるのか」、「なぜ日本人は竹島を日本の領土だと信じるのか」のように、「独島/竹島問題」を領有権問題ではなく認識の問題として捉え、その認識に影響を与えるものは何かを解明しようとしてきた。「独島/竹島問題」を論ずるときに歴史認識、ナショナリズムの問題は避けて通れない。が、定義することすら難しい歴史認識、ナショナリズムなどをどのように分析することができるだろうか。つい最近、『領土ナショナリズムの誕生—「独島/竹島問題」の政治学』をミネルヴァ書房から上梓したばかりである。そのなかで私は「独島/竹島問題」におけるマス・メディアの影響に注目し、日韓のマス・メディアが作り上げる「擬似現実」、世論の「生産」と「消費」との双方向的なメカニズム及びそれを可能とする社会・文化的な条件などが何かを解明しようとした。すなわち「独島/竹島問題」の事実が、政治家のレトリック、知識人の言説、そしてマス・メディアを通じて一般大衆にどのように伝えられるのか。その際「語られているもの」は何であり、その影に「語られていないもの」は何か。「独島/竹島問題」を論じる際に引き合いに出される表象は何か、な

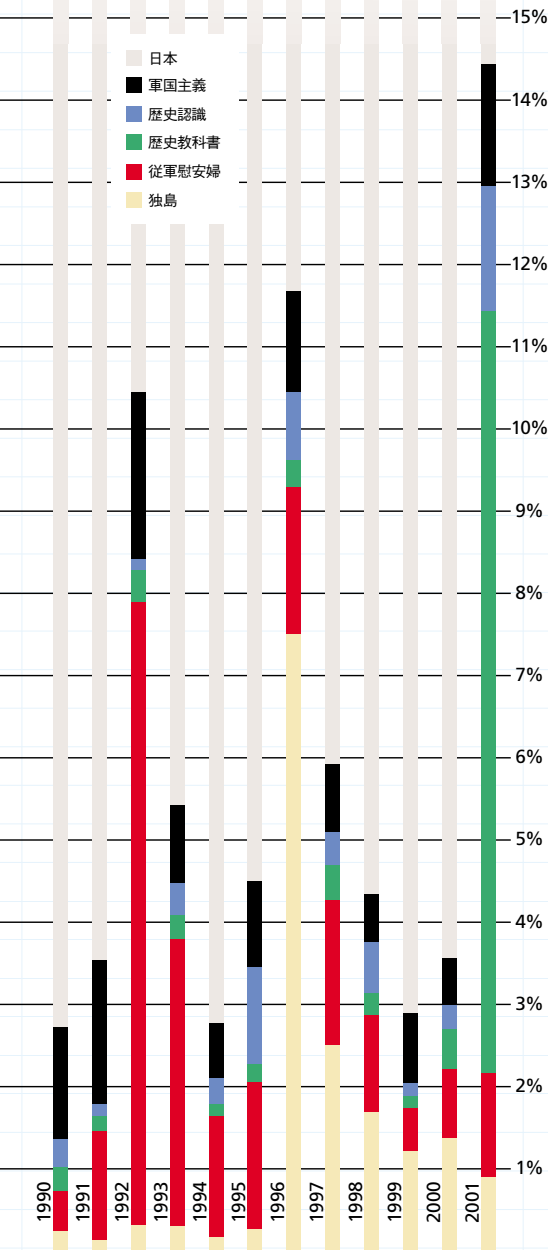
どを分析した。また、そのようにして形成された韓国人の認識構造はいかなるものであるかをも分析したのである。限られた紙面の関係上、詳しいことは省略するが、日韓のメディアテキストにおけるディスコースの内容と諸特性を比較分析した結果、韓国で構築された「独島論の言説空間」が偏った空間であることと、独島の領有権主張に歴史認識問題などを結びつけ、歴史の記憶を絶えず想起させていることなどが明らかになり、また韓国人はマス・メディアが作り上げた「擬似現実」に強く影響され、幼児期に既に、「独島は韓国の領土」という認識と、否定的日本イメージを抱くようになり、教育の役割は既に形成された認識を公認する役割をすることが明らかになった。また独島認識と日本イメージとが関連性が高く、かつ独島認識と日本イメージとが対日態度に影響を及ぼすことなども確認した。

私は上で「明らかになった」、「確認した」と書いたが、これは「独島/竹島問題」に関する12年間の新聞記事2,734件の内容分析、韓国の中・高・大学生2,112人のアンケート調査の分析によって下した、一応「科学的な」結論である。社会科学において重要なのはその手法の科学性より「認識論的切断」が可能で自由な精神であるということと言うまでもない。しかし、感情論に近い歴史認識論、ナショナリズム論を日韓関係の言説空間においてこれ以上一人歩きさせないためには、ポリティカル・サイエンスをサイエンスらしくするための努力は続けなければならない。

玄大松著「領土ナショナリズムの誕生」(ミネルヴァ書房・2006年)



1990年から2001年までの韓国の新聞における日本関連記事のなかで歴史認識、軍国主義、従軍慰安婦、独島などの記事が占める比率。



バリアフリー科学の夢

バリアフリー社会の実現に向けて、様々な学問が大きな原動力となりつつある。そんな原動力のひとつ、「福祉工学」は、すでに視覚・聴覚・発声障害者に明るい未来を示し始めている。



伊福部 達

先端科学技術研究センター 教授

<http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/>

喉頭摘出者のための抑揚
が出せる人工音声生成器
「ユアトーン」((株)電制、
道工試との共同研究によ
る)

音声パターンやメロディ
を指先の触覚に伝える聴
覚障害者用「タクタイル
エイド」((株)ティジー
との共同研究による)

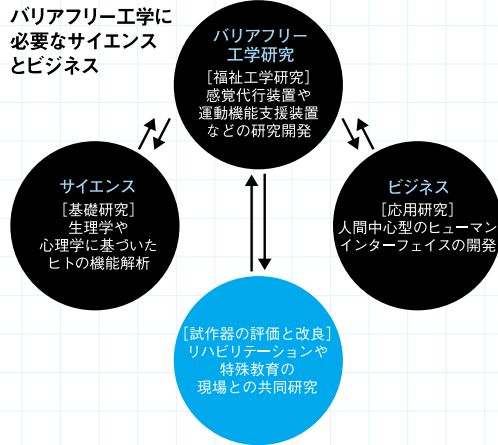
わ が国の少子高齢化や情報格差などが背景になり、「バリアフリー社会の実現」は急がなければならない課題です。私たちはこれまで、「福祉工学」という分野を通じて、弱ったり失ったりした聴覚、視覚、手足などを技術で助けるための研究をしてきました。実用化された例として、発声障害者のための「人工喉頭(製品名:ユアトーン)」、聴覚障害者のために声を字幕にする「音声自動字幕システム」や触覚に伝える「タクタイルエイド」、視覚障害者のために文章を音声と触覚に高速に伝える「触覚ジョグダイヤル」や立体音響で伝える「音響バーチャルリアリティ」、さらに弱った手足のリハビリテーションのために生かす「MH(水素吸蔵合金)アクチュエータ」などがあります。

福祉工学は、体の一部が低下したり失われたりしても快適な生活が送れるようにするのが目的ですので、医療の目的と変わりません。ただし、福祉工学は障害自体を治すのではなく、技術によって生活の場や体の機能を補完するという立場をとります。その点で、人工心臓のように体に人工物を入れて治すという医療技術とは大きく違ってきます。しかし、

文章を高速音声にして聞かせながら非文字情報を指先の触覚に伝える視覚障害者用インタフェース「触覚ジョグダイヤル」((株)アニモ、札幌市大との共同研究による)



バリアフリー工学に
必要なサイエンス
とビジネス



体の機能を補完するといっても、ロボットのセンサや手足が壊れたので、それを他のものに置きかえればよいという簡単なものではありません。

人間の脳には、環境の変化や機能の低下・欠損によって、今まで使われていなかった脳のある部分が働き出し、新たな能力が生み出されるという面があります。手を失った人が足で自在に文字を書くようになり、視覚を失った人が音だけで部屋の大きさや、目の前の障害物の存在を感知するようになるといった例が挙げられるでしょう。このような脳の変化は「可塑性」と呼ばれるもので、それによって代償機能が生まれることが知られています。この代償機能を壊さないようにしながら機能を補完することが重要になります。

その一方で、難聴になると単に聴力が落ちるだけではなく、言語の処理能力が変わったり遅くなったりするという脳の変化も起こります。そのため、声を大きくして耳から脳に送るだけの補聴器は、高齢で難聴の人たちの約半分が役に立たないといえます。本当に役に立つものにするには、脳内における言語処理の状態を検査し、その結果にあわせて補聴器を設計する必要があるわけです。

また、バリアフリー社会は工学的な技術開発だけでは実現し得ないといえるでしょう。モノを知覚する脳の動きやそれに伴う人間行

動の研究、バリアフリー製品が普及したときの経済効果の調査、ユーザーによる評価などを扱う「バリアフリー科学」が必要になります。先端研には多様な分野の専門家がいることから、バリアフリー科学を実現する場としては最適どころです。そして、これまで社会保障費を受けて生活していた人たちがバリアフリー技術の助けでもう一度働くチャンスを得て、生きがいのある生活を取り戻すようになるという役割も果たすでしょう。

さらに、バリアフリー科学はヒトの機能と同じような機能を技術で実現するという難題に挑戦することになるので、従来の科学技術の延長では考えられなかったようなイノベーションが生まれるかもしれません。私たちは、そのイノベーションにより新しい市場が開かれ、より多くの人々が科学技術の恩恵を受けられればという「夢」を抱いています。



聴覚障害者のための「音声同時字幕システム」(夕張国際映画祭にて、(株)ビー・ユー・ジーとの共同研究による)